様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：３４３０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１０９９６

研究課題名（和文）長期在宅療養者とその家族における家族レジリエンスを高める訪問看護実践の構造化

研究課題名（英文）Structuring Home Care Nursing Practice to Enhance Family Resilience in Long-Term Homebound Patients and Their Families

研究代表者
前川　宣子（河原宣子）（Maekawa(Kawahara), Noriko）

京都橘大学・看護学部・教授

研究者番号：００２５９３８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：長期在宅療養者とその家族への訪問看護実践についてシステム分析を用いて可視化した．その結果，【訪問看護師のインテグリティ】【在宅療養者と家族のニーズが満たされるリードタイム】【インテグリティ・マネジメント】【ビジネスモデルキャンバス】【外部環境に関するモニタリング】【地域における存在価値の創出】が認められた．また，【訪問看護師のインテグリティ】を高め，家族のセルフケアが高まるケアを実施することで緊急呼び出しも減少し，訪問スケジュールの効率が上がっていた．しかし，家族がセルフケアを発揮し続け，訪問看護師も訪問看護実践に真摯に向き合い続けることは，お互いが疲弊し共倒れになりかねないとも推測された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
長期にわたる在宅療養者とその家族を家族システムとしてとらえ，療養生活におけるケアの軌跡を明らかにすることは，家族看護学的視点から意義が高い．人的・物理的関係を含む環境が多様である在宅という場所で，年月を経るに従い変化していく家族システムに，訪問看護師がどのように関わっていけばよいかを構造化する資料になる．

研究成果の概要（英文）：We used systems analysis to visualize the practice of home care nursing for long-term home care patients and their families. As a result, the following were identified: "integrity of home care nurses," "lead time to meet the needs of home care patients and their families," "integrity management," "business model canvas," "monitoring of the external environment," and "creation of value in the community. In addition, by increasing the integrity of the home care nurses and implementing care that increased family self-care, emergency calls were reduced and the efficiency of the visit schedule was increased. However, it was also surmised that if the family members continued to demonstrate self-care and the home care nurses continued to be diligent in their practice of home care, both parties might become exhausted and collapse together.

研究分野：家族看護学

キーワード：訪問看護　家族看護　システム分析　高齢・過疎地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本邦では，病床の機能再編や地域包括ケアシステムの推進に伴い，近年，訪問看護ステーションの数および訪問看護利用者数が増加している（https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000170290.pdf）．また，高齢化がさらに進行することで，訪問看護利用年数も長期化することが推測される．特に，医療依存度の高い長期在宅療養者が増加することが予測される．このことから，生産年齢人口が減少する中で在宅看護を担う看護人材の確保や育成および看護の質向上がさらに重要な課題となってくると考えられる．

在宅看護は，在宅療養者と家族介護者が，彼らが療養生活を営む家庭で看護を提供し，その生活の質を維持･向上することが目的となる．さらに，医療依存度の高い療養者とその家族の場合，在宅看護の中心的存在になるのが，訪問看護師である．また，本邦の人口構造の変化は家族形態にも影響を与えており，家族に焦点を当てた看護実践の研究が求められる．

医学中央雑誌（https://search.jamas.or.jp/）により，訪問看護 or 在宅看護 and 家族のワード及び原著論文で検索してみたところ，2000 年までは 24 件であったのが，2001 年～2018 年まででは 1,400 件と急増していた．過去 20 年間において，当該分野の研究ニーズが急速に高まってきたことが窺われる．

一方，長期在宅療養者とその家族に絞り込み，医学中央雑誌（https://search.jamas.or.jp/）により，訪問看護 or 在宅看護 and 家族 and 長期療養のワード及び原著論文で検索してみたところ，3 件が抽出されたが，家族看護学の視点から長期在宅療養者とその家族への看護について，述べられた論文はなかった．家族看護学においては，家族をシステムとして理解し，システム全体の関係性へアプローチすることが求められる．家族の在り方は多様であり，事例の蓄積から知見を得ることが重要であると考え，本研究では，長期在宅療養者とその家族の家族システム全体の関係性にアプローチしている訪問看護の実際を可視化することを目的とする．

２．研究の目的

高齢・過疎地域における長期在宅療養者とその家族への訪問看護実践を，システム分析を用いて可視化する．

３．研究の方法

(1)国内外の先行研究より，高齢・過疎地域の訪問看護実践内容を網羅的に抽出する．

(2)文献から高齢・過疎地域における訪問看護実践に関する内容を抽出し，KJ 法を用いたグルーピング（大グループ・中グループ・小グループ）を行う．グルーピングの結果について客観性を高めるために，研究協力者と共に確認する．

(3)研究協力施設は，高齢・過疎地域にある訪問看護ステーションとする．また，長期在宅療養者を，在宅での療養生活が 10 年以上継続している者（すでに在宅療養者が死亡した事例も含む）とする．研究協力者は，豊富な経験を有し，時間的な経過を踏まえて訪問看護実践現場での事象を理解している在宅療養者とその家族に 10 年以上継続して関わっている訪問看護師とする．

(4)訪問看護実践に影響を及ぼす要因の検討を，研究協力者と共にブレインストーミングを実施し，KJ 法により抽出した小グループ項目についてリスクマップを作成する．リスクマップは，リスクを影響度と発生可能性という 2 つの評価軸で評価し，結果を確認するためのツールである（[11]宮林正恭（2008），[12]朝日監査法人（2001），[13]仁木一彦（2017））．訪問看護師による看護実践は，いかなる状況下でも一定の質を確保しながら継続することが求められる．本研究においてリスクマップを用いる理由は，訪問看護実践を長期間にわたり継続する上で，どのようなリスクが潜んでいるかについても含めて検討するためである．

(5)KJ 法により抽出した小グループ項目およびリスクマップによる検討結果を踏まえて，研究協力者とブレインストーミングを行い，長期在宅療養者とその家族への訪問看護実践において存在・関与する複数のステークホルダーを網羅的に抽出し，抽出したステークホルダーがコントロールした変数をリストアップする．相互に関連する 2 変数について因果リンクを検討し，因果ループ図を作成して俯瞰的に可視化する．作成した因果ループ図は研究協力者と共に確認する．因果ループ図の作成には，Vensim® Professional 9.4.2 を用いる．

(6)倫理的配慮

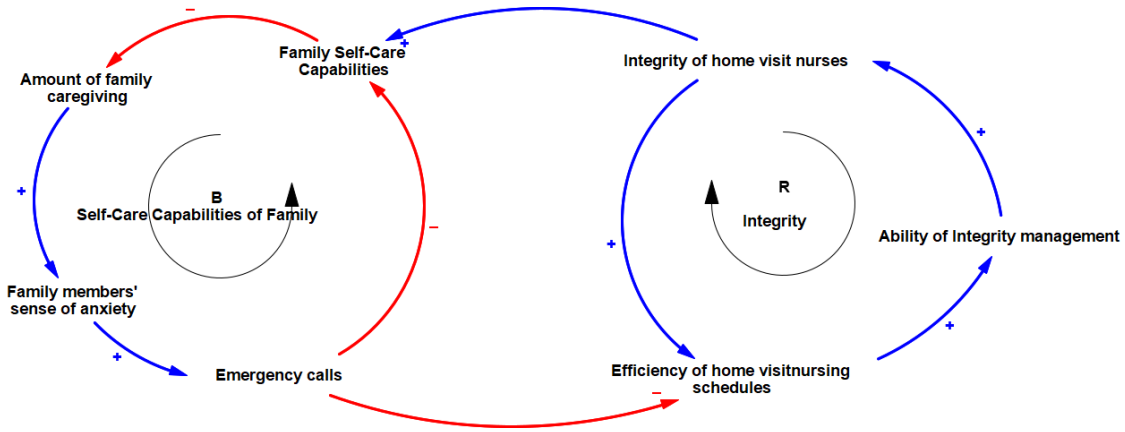
本研究は，研究代表者が所属する京都橘大学研究倫理委員会にて承認を得た（承認番号 22-04）．

４．研究成果

(1)検索エンジンとして医中誌 Web（全年検索，原著論文）および EBSCOhost（1999 年～2021 年，原著論文）を使用し，高齢・過疎地域における訪問看護実践およびそれに関連した記述のあった国内外の文献 100 件を精読し，本研究に特に関連する文献 19 件を選択した．高齢・過疎地域の訪問看護実践に特化していない文献も含まれていたが，本研究に有用と考えられる文献は分析対象とした．

(2)(1)より訪問看護実践に関する内容について抽出し，グルーピングと表札づくりを行い，小グループ 65 項目（各項目は“○○”と記す），中グループ 23 項目（各項目は＜○○＞と記す），大グループ 6 項目（各項目は【○○】と記す）を作成した．大グループは【訪問看護師のインテグリティ】【在宅療養者と家族のニーズが満たされるリードタイム】【インテグリティ・マネジメント】【ビジネスモデルキャンバス】【外部環境に関するモニタリング】【地域における存在価値の創出】であった．【訪問看護師のインテグリティ】は，マニュアル作成や委員会活動といった“訪問看護実践の質向上に関する業務” を含む＜訪問看護実践の質向上に関する業務＞や“自己研鑽” 等の＜看護実践力向上のための生涯学習活動＞と報告・連絡や物品請求等の様々な＜訪問看護実践を支える日常業務＞を踏まえた＜在宅療養者への直接的ケア＞＜家族へのケア＞を倫理観をもって真摯に実践する内容となっていた．【在宅療養者と家族のニーズが満たされるリードタイム】は，“訪問に係る長距離・長時間移動” や“スタッフの状況に応じた訪問看護スケジュール調整” といった高齢・過疎地域に特徴的な状況を含みつつ“利用者の個別性に応じた訪問看護スケジュール調整”を実施する＜効率的で利用者にとって最適な訪問看護スケジュール＞と，さらに“利用者の困りごとへの迅速な対応” や“利用者からの緊急連絡時への迅速な対応”という在宅療養者と家族のニーズに臨機応変に対応する＜在宅療養者と家族からの緊急呼び出しへの対応＞であった．【インテグリティ・マネジメント】は，“勤務管理”や“人材確保”等の＜安定した労働環境＞と“職場の雰囲気”を含む＜スタッフのモチベーションの維持・向上＞や＜管理者のリーダーシップの維持・向上＞，“実習生指導”や“現任教育”を含む＜人材育成＞という内容で【訪問看護師のインテグリティ】を支えるものであった．【ビジネスモデルキャンバス】は，訪問看護ステーションのビジネスモデルを設計，実現するための基盤となる＜適切な経営管理＞＜顧客の確保＞と“災害対策”を含む＜危機への対応＞であった．
【外部環境に関するモニタリング】は，＜高齢・過疎化＞や“訪問地域の地域特性の把握”を含む＜高齢・過疎地域における療養ニーズへの感受性＞と“専門職サービスや訪問地域の他の訪問看護ステーションのモニタリング”等の＜専門職による在宅サービスのモニタリング＞，＜法制度への感受性＞で【ビジネスモデルキャンバス】とともにビジネスモデル設計と実現のために必要な内容となっていた．【地域における存在価値の創出】は，“所属する訪問看護ステーションの理念に関する理解”や“訪問看護ステーションの地域社会への貢献”を含む＜Core competence（コア・コンピタンス）の分析＞，＜地域特性の活用＞，接遇や他職種・住民との付き合いを含む＜世評への感受性＞と＜在宅療養者と家族の満足度＞であり，訪問看護ステーションの存在意義を示す内容となっていた．また，大グループには分類されなかったが，＜多職種連携活動と活用＞も認められた．
(3)次に，小グループ 65 項目についてリスクマップについて検討した．表 1 に基づき，小グループの 65 項目について，研究協力者である訪問看護ステーションの管理者・スタッフ（常勤２名・非常勤１名）・事務員の合計５名に，「訪問看護実践に，どれだけ影響を及ぼすか？」および「訪問看護実践にダメージを及ぼすリスクとして発生する可能性がどれだけあるか？」を５段階で評価してもらった．以上の結果を踏まえ，リスクマップを作成した．研究協力者による５段階評価において，小グループ 65 項目について，「訪問看護実践に，どれだけ影響を及ぼすか？」では中央値が 4.8，「ダメージを及ぼすリスクとして発生する可能性がどれだけあるか？」では中央値が 4.2 とバラツキが少なかったため，四分位で検討し，僅差ではあったが 12 のグループに分けた．
(4)12 に分かれたグループを，さらに[12]朝日監査法人（2001）65P および[13]仁木一彦（2017）106-109P を参考に，①重要な脅威となりうる高リスク項目，②発生の可能性は低いが，発生した場合重要なインパクトのあるリスク，③重要性はないが，発生の可能性は高いリスク，④重要度・影響度の低い項目で 4 分割にした．①重要な脅威となりうる高リスク項目は，在宅療養者と家族の満足度および彼らへの直接的ケアに強く関係するものであった． 【外部環境に関するモニタリング】における＜法制度への感受性＞は①重要な脅威となりうる高リスク項目として認識されているが，＜高齢・過疎化＞＜高齢・過疎地域における療養ニーズへの感受性＞＜専門職による在宅サービスのモニタリング＞については④重要度・影響度の低い項目となっていた．
【ビジネスモデルキャンバス】の＜危機への対応＞において“不都合な問題でも組織内で共有・公開できる危機管理体制”という日常的な訪問看護業務の中で容易に起こりうるインシデントやアクシデントについては①重要な脅威となりうる高リスク項目として認識され，“災害対策” といった予測困難な危機に対しては④重要度・影響度の低い項目となった．【地域における存在価値の創出】における＜世評への感受性＞で，“苦情への対応や態度・マナーなどの適切な接遇” “他機関・多職種との上手な付き合い” については①重要な脅威となりうる高リスク項目として認識され， “住民や民生委員・保健推進委員等との上手な付き合い”は④重要度・影響度の低い項目であった．また，＜看護実践力向上のための生涯学習活動＞の“自己研鑽（研修会参加・資格取得など）”“研究活動（看護研究・学会発表など）”ならびに【インテグリティ・マネジメント】の＜人材育成＞“実習生指導”“現任教育”は④重要度・影響度の低い項目であった．さらに， <多職種連携活動と活用>の“他職種への教育的活動” は④重要度・影響度の低い項目と認識されていた．なお，同じグループ内の“他機関・多職種との連携活動”は，② 発生の可能性は低いが，発生した場合重要なインパクトのあるリスクに位置していた．

(5)以上を踏まえて，研究協力者と約１時間，ブレインストーミングを実施した．在宅療養者と家族の健康課題への直接的なリソースの投入については重要視されているものの，倫理観をもって真摯に訪問看護実践および家族看護実践を完遂する訪問看護師のインテグリティを維持向上する専門職としての研鑽，在宅ケアサービスを担う人の実践力を高め、後進の育成につなげること，また，コミュニティ全体を俯瞰的にモニタリングすること，そのうえで効果的かつ効率的な対応をすることや地域特性の活用についてもリスクを意識した認識は低い傾向にあることを共有した．さらに，在宅療養者が重症化あるいは看取りの時期になると医療依存度や介護度も高くなること，家族の介護量と介護負担も増加し，介護に関する不安感が高まること，家族の不安感が高まると訪問看護師への緊急呼び出しが増加すること，訪問看護師への緊急呼び出しは，在宅療養者と家族のニーズが満たされるリードタイムに影響を及ぼすこと，しかし，家族のセルフケア力を高めることで，家族から訪問看護師への緊急呼び出しが減少すること，したがって，家族のセルフケア力を高めるケアを実践するには訪問看護実践のインテグリティを維持向上することが重要であることが導き出された．以上の結果から，特に訪問看護師のインテグリティと家族のセルフケア力に焦点を当てて因果ループ図を作成した．



以上より以下の点が明らかとなった．
(1)高齢・過疎地域における長期在宅療養者とその家族への訪問看護実践として，【訪問看護師のインテグリティ】【在宅療養者と家族のニーズが満たされるリードタイム】【インテグリティ・マネジメント】【ビジネスモデルキャンバス】【外部環境に関するモニタリング】【地域における存在価値の創出】が認められた．
(2)　訪問看護実践に影響を与える内容として，在宅療養者と家族の健康課題への直接的なリソースの投入が重要視されていた．
(3)　訪問看護師のインテグリティを高め，家族のセルフケアが高まるケアを実施することで緊急呼び出しも減少し，訪問スケジュールの効率が上がっていた．しかし，家族がセルフケアを発揮し続け，訪問看護師も訪問看護実践に真摯に向き合い続けることは，お互いが疲弊し共倒れになりかねないとも推測された．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 河原宣子，湊宣明，野島敬祐，松本賢哉
２．発表標題 Visualization of Family Nursing Practices for Long-term Home Care Patients and Their Families Living in Elderly and Depopulated Areas in Japan: A systems analysis
３．学会等名 16th International Family Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Noriko Kawahara,　Kosuke Kawamura,　Hiroko Anabuki,　Keisuke Nojima,　Kenya Matsumoto
２．発表標題 Characteristics of Home-visiting Nursing Practice for Long-term Home Care Recipients who are Highly Dependent on Medical Care
３．学会等名 14th International Family Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松本　賢哉 (Matsumoto Kenya) (60454534)	京都橘大学・看護学部・教授 (34309)	
研究分担者	野島　敬祐 (Nojima Keisuke) (70616127)	京都橘大学・看護学部・准教授 (34309)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	湊　宣明 (Minato Nobuaki) (30567756)	立命館大学・テクノロジー・マネジメント研究科・教授 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関